

門脇俊介とドレイファスはどこで分かれたか

ハイデガーと認知科学の対話を通して

吉田恵吾

はじめに

本稿は、M・ハイデガーの著作についての内在的解釈の研究と認知科学の領域における成果とを対話させながら人間の知覚や行為を探究している、門脇俊介とH・L・ドレイファスのこれまでの議論を概観し、その重なりと隔たりを考察することで、私たちが今後その問題を引き継いで考えていくための道を模索する試みである。

日本で哲学に関心を寄せる者たちの中で、『存在と時間』についてのドレイファスのコメントリー、『世界内存在』の監訳者である門脇は、そのハイデガー解釈を紹介した研究者として広く知られており、彼自身もドレイファスの解釈を概ね共有しているものと見なされているように思われる。たしかに、門脇は、それまでのハイデガー研究には見られなかった大胆な仕方です『存在と時間』の前半部に的を絞ったドレイファスの解釈を、「他の数多くの研究書や注釈書よりもはるかにハイデガー的現象学の輪郭をくつきりと示し、ハ

イデガ－的現象学に強くコミットしているように」(門脇二〇一〇、二二〇) 思われると評価している¹⁾。また、一九二七年のドイツで公刊された『存在と時間』における「世界内存在」というハイデガ－の独創的な着想と、それとはまったく背景を異にする認知科学という学問領域との間で、哲学的に重要な対話を可能にしたという点でも多大な功績を認めている。だがもちろん、これから見ていくように、門脇はドレイファスのハイデガ－解釈にすべての点で同意しているわけではない。ドレイファスと同様に認知科学の新しい知見にもつねに目を配りながら、門脇はしかし徐々に、「解釈 (Auslegung)」や、「分節化 (Artikulation)」としての「語り (Rede)」とこの概念に着目した独自のハイデガ－解釈を用意しつつあったのである。

以下では、まず第一節で門脇とドレイファスに共通しているハイデガ－解釈の要点を反表象主義的着想として取り出す。次いで、第二節でそのような議論と認知科学の関係を見る。ドレイファスも門脇も認知科学に強い関心を向け、それを論じている。しかし、認知科学に対する両者の態度には違いが見出される。そこに、われわれはドレイファスと門脇の分岐点の一つの現れを見出すだろう。そして第三節では、ハイデガ－解釈における門脇とドレイファスの異なりがどのようなものであったのかを明らかにする。最後に、そのようにして門脇が新たに歩みを進めようとしていた議論を今後さらに展開させるために私が必要だと考える論点を、第四節で示唆する。

一 反表象主義者としてのハイデガ－——門脇とドレイファスが共に見たもの

ハイデガ－は、よく知られているように、その主著『存在と時間』において、存在一般の意味を問う問いを立てることを目論んでいるが、そのための手がかりを、われわれ人間的現存在がさしあたり求めているその日常生活において理解してしまっている、存在についてのそのような理解・了解 (Verstehen) に求め

る。この日常的な存在理解の分析を通してまず指摘されるのは、例えばわれわれが自分の部屋で道具を使って何か作業をしているとき、逐一明示的な命題を心中に掲げ明確な目的や計画に導かれているわけではない、たいていはよく慣れ親しんだ環境の中でスムーズな作業に没頭しているという事実である。このような場合のふるまいは、「道具の連関、自己の身体を中心とする行為空間、行為における道具との距離」（門脇二〇一〇、一一九）を非主題的な特殊な仕方で見抜く「配視（*Umsicht*）」に導かれ、「道具の織りなす配置に対応する仕方では技能化されている」（四九）。そして、この配視や技能的な知を可能にしているものが、「自らふるまいを局所的なコンテクストへとそのつど適合させていく、自己と世界との同時的な理解——世界内存在（同）」という現存在の構造であることが明らかにされていく。このような分析によりハイデガーは、われわれの日常性を可能にしている全体論的な背景的理解を取り出すことに成功した。

このとき、使用されている道具の方に目を転ずれば、それは決して認識のような活動が対象とする実在物ではなく、目立たないときこそその本領を発揮するという性格や、他の道具やそれが使われる目的、またはその使用のふるまいが置かれているコンテクストなどを背景としてのみ意味をもつという「全体論的な性格」をもつ存在者であることがわかる。このような存在者の存在性格をハイデガーは「道具的存在性（*Zuhandenheit*）」（Heidegger 1972, 69）と術語化し、他方で理論的ふるまいの要素的な対象となるような物質的、事物や意識状態などの存在者の存在性格を「事物的存在性（*Vorhandenheit*）」（71）と呼ぶ。これらの術語は、理論的観照を人間のふるまいの典型として探究してきた従来の哲学が副次的なものとなした道具的存在性を中心へと移し、逆に、事物的存在性の方を道具的存在性の欠如的派生態と位置づけ直す目論見の中で考察されたものと捉えることができる。このような存在のカテゴリーの勢力図の「中心と周縁の転換」（門脇二〇一〇、五九）に、門脇とドレイファスはともに、ハイデガー哲学の最も重要な功績を見て取った。以下では、この功績について両者がどのような脈絡から評価を与えているのか、もう少し詳しく辿っておきたい。

門脇は、ハイデガーの『存在と時間』を、「存在の物語」と「志向性の物語」とが緊張をはらみながら一体化した著作であると解釈する(二三以下)。このうちの前者は、存在一般についての学を構築するための基礎存在論としてハイデガーが着手した、現存在についての分析である。右に少し見たように、この分析は「伝統的な哲学的概念を新しい存在論的なポキャブラリーのうちへと解消しよう」と(二二五)「既存のカテゴリを徹底して解体しながら」(同)進められるのだが、門脇の診断によると、他方でこの分析はそれでもなお、ハイデガー本人が考えているよりもはるかに既存の問題設定に、つまり後者の人間の志向性についての哲学的伝統に依存している。ただし、このことは『存在と時間』の不毛さを意味するどころか、逆に「ハイデガーが離脱しようとした哲学的伝統をむしろ豊かにする可能性」(同)に満ちていることを示唆していると解することができる。こうして門脇は、前者のハイデガー独自の存在の物語を後者の志向性の物語の文脈において解釈していくと同時に、存在の物語を形成するハイデガーの概念の方から伝統的な志向性の物語へも新しい光を当て広く探究していく。

ハイデガーによって刷新される志向性の物語に着目して『存在と時間』を解釈する点では、ドレイファスも同様である。彼は『世界内存在』の序論「なぜ『存在と時間』を研究するのか」で、伝統的哲学に対する「ハイデガーの反論は、自足した個別的主観がその心的内容によって世界へと向けられているというような志向性よりも、もつと基礎的な志向性の形式が存在する、ということである」(Deleuze 1991, 23)と述べ、この「もつと基礎的な志向性の形式」の解明を中心にコメントリーを展開していく。そしてやはりドレイファスも門脇と同様、この志向性の物語とハイデガーの存在の物語との一体化に注目する。すなわち、「もつと基礎的な志向性」を問うことで、「われわれが知識化できるようなものではなく——すなわち世界に対応する心中の表象ではなく——、われわれが端的にそれであるものとしてのこうした存在了解の本性を問うことを彼「ハイデガー」はやっている」(3)と捉えるのである。

この引用からは、ドレイファスがハイデガーの志向性の概念の力点を、その反表象主義的着想に見ていることがわかる。彼の解釈によれば、認識論的な観点から心の内の観念が外的世界に関して真になるのはどのような場合かと論じてきた、デカルトからフッサールに至るまでの伝統的な哲学者たちは、密かに表象主義的発想法を前提としており、ハイデガーの革新的な志向性概念は、その前提を根底から問い直すことよって鍛え上げられている(5)。ドレイファスはこの前提の存在を、英語圏で主流派である分析哲学の発想法にも、さらには認知科学などの人間科学の領域にも見出し、それらを「プラトン以来の西洋哲学がはぐくみできた理論中心主義、そしてその近代哲学版である表象主義の完成形態」(門脇二〇一〇、二一九)と見なす。こうして、「現象学対分析哲学という図式化を放棄して、表象主義の伝統に忠実なフッサールから——おそらくあのカルナップらの論理実証主義を含めて——サールにまで至る系譜」(二二四)を、ハイデガーを代表とする反表象主義の立場と対立させるのである。

このようにハイデガーに反表象主義的着想を読み取る点では、門脇もまた、ドレイファスと歩みをとともにする。門脇は、ハイデガーが疑問視していると思われる表象主義を大きく二つに(より細かく見る場合には表象主義2をさらに二つに)分類し、各々の問題点を以下のように整理している(門脇二〇〇二、四一〇、門脇二〇一〇、六二一―六三)。

表象主義1は、「心のうちに与えられた観念としての表象を知覚や思考における直接的な対象」(門脇二〇〇二、四)と見なした上で、そのような要素的な性格の強い観念に「心の外部を表象する役」(五)を担わせる。これは、直接的な対象に訴えかけることでそれ以上の基礎づけを不要にできるはずだと考える、デカルト以来の基礎づけ主義の発想による。この基礎づけ主義の核心は、「知覚において認知される事物のあり方を、『Fに見える(looks F)』という表象の語法から定義しようとすること」(三三)にある。だが、指示の関係をモデルにして論を展開するこの立場は、「指示するものと指示されるものとの一対一の対応関係」

(五)を扱うことはできても、「英語の *Prop* 節に後続する命題的内容」(六)など、真偽を問題にするといった規範的要求を担うはずのものに対処することができない。

これに対して表象主義²は、「文や命題を表象することの最小単位として導入」(七)し、「われわれは世界を、命題と推論の規範的な体系を通してのみ表象することができる」(門脇二〇一〇、六二)とすることに よって、表象主義¹とは異なり、規範的要求に応ずることができる。つまり、「信念や意図を含んだ『志向性の体制』を、表象することを可能にするシステムとして考察する」(門脇二〇〇二、七)この表象主義²は、「命題の正当化の責任を引き受けるという意味でのコミットメント」(八)や、さらには、志向性のコミットメントを可能にしているはずの「志向性同士の全体論的な体系」(同)を扱うことができる。だが、この立場もやはり、「何らかの命題内容を真とみなす信念の志向性を中心にある限り、文あるいは命題が正しく世界を表象するか否か」(同)を関心の中心としている点では表象主義の一つなのであって、「命題が適切に適用されるために非明示的に前提にされているもの、すなわちその適用のコンテクストと背景的慣習」(門脇二〇一〇、六七)、言い換えれば「命題的な表象抜きにより根源的な志向性」(門脇二〇〇二、九)には論が及ばないという問題を残したままである。

このような表象主義¹と²の問題を見抜き、反表象主義的着想によって新たな根源的志向性の全体論的構造を明らかにしたことに、門脇とドレイファスはともに、ハイデガーの中心的な功績を見て取った。「ハイデガーの新しいアプローチの根底にあるのは、日常的対象に対処していく『心抜き』技能の現象学であって、この技能こそあらゆる理解可能性の基礎」(Dreyfus 1991, 3)なのであり、これを見抜いたアプローチによってハイデガーは、「人間の活動が理論によって説明できるとするプラトニックな前提であるとともに、デカルト的伝統が意識主観に与える特権的な地位」(Dreyfus)を疑問に付した。そうすることで、表象主義が密かに前提としながら自らは注目することがなかったもの、すなわち、「われわれが社会化されてそのなかへと巻き込まれ

ていながらもわれわれの心中でそれが表象されることがないような、日常的ふるまいという背景（*field*）に重要性を認めることができたのである。以上のようにして、門脇とドレイファスの両者は、その反表象主義的な側面、つまりドレイファスの言う「心抜き」の技能の現象学を、ハイデガーの中心的功績と解釈する。

二 認知科学へのハイデガーの影響、あるいは、ハイデガー解釈への認知科学の寄与

近年、認知（神経）科学の発展により、認識や行為について哲学が従来問うたことのなかったような種類の様々な問いが突きつけられており、実際それに応ずる議論が哲学の側でも繰り広げられている。他方でこの事態からは、認知科学が哲学に対してそのような問いを提起しうるのであれば、それは両者に共通の思考が存していることの現れであるとする見解を導き出すことも可能である。門脇はそうのように考え、「認知科学の展開そのものが、じつはそれ自体として——意識されているにせよ、そうでないにせよ——哲学的思考によって形作られてきたのではないか」（門脇二〇一〇、五七）、「認知科学は、そこに内在する哲学的思考なしには、科学として発進することができなかったのではないか」（同）と問いかけている。門脇とドレイファスはともに、第一節で見たようなハイデガーの反表象主義的着想こそが、そのような哲学的思考として重要な役割を果たしうると見立てた。そこで本節では、認知科学に対する門脇とドレイファスの態度を見ていこう。そしてそこにおいてわれわれは、門脇とドレイファスの認知科学に対する態度の違いを見出すだろう。ドレイファスは基本的にハイデガーの観点から認知科学批判を行うが、門脇は批判を超えて、哲学と認知科学のより生産的な関係を考えている。実際、ハイデガーの思考は、認知科学の歴史において、人工知能の可能性を指摘してみせるという批判的作用をもっただけでなく、「人間の認知へのまったく新しいアプローチ」（五八）をも示唆してきた。他方では、認知科学における成果が、ハイデガー哲学への認知神経科

学的基礎を与えてくれることさえ、期待されている。まずは、ドレイファスと門脇がともに見てとった、ハイデガーの思考が認知科学に対する批判者として機能する側面から見ていこう。

批判的にはたらいだ一つ目の段階は、『コンピュータには何ができないか』(Dreyfus 1972)のドレイファスによる、認知科学の主流派であった古典的計算主義の原理的困難に対する指摘に見出すことができる。計算主義者は、『世界』とは、明確に限定された性質を持った明確な対象の総体であり、『心』あるいはコンピュータは、こうした世界についての記号化された命題的表象をその内部に蔵し・操作し、何らかの目標が与えられるなら、与えられた表象のもとで最も合理的な行動を選択する記号処理システムである」(門脇二〇一〇、六一)と考えてきた。しかし、そのような古典的計算主義には克服しがたい困難が潜んでいる。それは、「一定のコンテキストの内部でのカップリングや行為の方向づけを支える、日常的常識や技能、あるいは慣習として身に付いている背景的理解が、形式的な記号処理システムとしては設計できない」(六二)ということである。計算主義のこの困難を考察するために、事物的存在性へのハイデガーの批判に有効性を見出すことは不自然ではないだろう。ドレイファスは、右の書でハイデガーを、「明示化可能な規則と事実の集合によって状況と人間のふるまいを分析することに強力に反対する論者の一人として登場」(五一)させた。前節で見たハイデガーの反表象主義的着想が示した、「日常的に世界内存在する人間にとっては、道具の使用は何ら明示的な命題的表象なしに——あるいは明確な知覚像すら体験されることなしに——、道具と使用の技能とのあいだの直接的なカップリングとして生起する」(五〇)という洞察や、そのような人間は「明確な目的表象や計画によって導かれているのではない」(同)という洞察が、計算主義の困難の由来をも説明していると考えたのである。

この計算主義が衰退した後に興隆してきたのが、コネクショニズムである。コネクショニズムは、「人間の脳に模した新たなモデルを提案」(五二)した。たしかに、その提案は、「人間のふるまいはすべて形式的

な記号表象に置き換えて理論化できるという、プラトン以来の哲学的偏見に与してはいないし、神経ネットワーク内のそれぞれの要素がネットワークと連想的で全体論的な関係を取り結んでいるとする」(同)点で、ハイデガーが分析した現存在の了解の全体論的性格に対応しているように思われる。だが最終的には、この提案に対して、ハイデガーの哲学は批判的にはたらくことになる。この議論を展開しているのが、ドレイファスの『コンピュータには何ができないか』第三版で新たに加えられた序論である。その議論によると、人間はそのつど「適切に関連した(relevant)」特徴を見分けて状況に応答しているが、それと同じようにネットワークのアーキテクチャーをデザインすることは非常に困難である。というのも、どれほどたくさん学習をさせたとしても、ネットワークは、過去の経験によって重要性が示される特徴は認識できるようになっても、目下の状況を見る観点を決める現在の経験が示す特徴に反応することは難しいからである。そのため、何らかのペースペクティブに基づいた予期をもって状況に入り込んでいき、予期してはいなかった入力に出会っても場合によっては重要な特徴を認識したり、あるいは目下の状況下では現前してはいないが予期される入力に重要性を認識したりする能力をもたせることができない。それらの能力をもつネットワークはまだ実現しておらず、それを行う人間の脳のアーキテクチャーを推測することすらできていないというのが彼の見解である(Dreyfus 1992, xxviii)。コネクショニズムの試みは未だ、ハイデガーが反表象主義的着想によって明らかにした、「一定のコンテクストの内部での日常的常識や技能、背景的理解といった世界内存在の本質をなすもの」(門脇二〇一〇、五四)に十分に応じうる提案とはなっていないのである。

これに対して今度は、ハイデガーの哲学的思考が新たな認知科学の試みに対して積極的な意味をもったと思われる点を見よう。その一つ目として、ウイノグラードとフロレスが『コンピュータと認知を理解する』の中で提起しているシステムが挙げられる。これは、「日常的なふるまいや道具使用の状況に注目したハイデガーを範として、コンピュータ・システムの『存在論的設計』の必要を訴え」(五三)たものである。

ハイデガーの主張である、道具の目立たなさという特性や、その道具との出会いを可能にしている全体論的背景、あるいは日常的ふるまいがうまくいかなかった場合に生じる対象化や熟慮の可能性といった概念を取り入れることで、「人間の存在に沿ったより深いシステムの設計を導く」(同)ことができるのではないかと提案がなされたのである。

さらに二つ目の例として、門脇が「重要な試み」(同)と称する「ハイデガーAI」が挙げられる。これは、アグリーとチャプマンが、「表象を用いない知的『被造物 (creature)』の設計で知られるブルックスが活動しているMITの人工知能研究室で、コンテキスト抜きの記号表象や内的なプランニングを用いないで、環境と相互作用をなす知的プログラムを作ろうとした」(五三―五四) 試みである。この試みは、「積み木の世界 (ビデオ・ゲーム)』の内部で主体を環境と相互作用させる」(五四) という限定的なもので、「『世界内存在』に丸ごと到達しよう」(同) とするものではないのだが、「ドレイファスがハイデガーに帰している、二つの重要な洞察をシリウスに受け取っている」(同) 点で注目される。すなわち、「日常的なふるまいを導いて環境と相互作用をなすためには、ふるまいの主体は世界をモデルとして内的な表象を作る必要はないのであって、世界それ自体が『最良の表象』なのである」(同) という洞察や、「日常的なふるまいを導くのはあらかじめ明示的に心的に構成された計画や意志ではなく、そうした意志や計画なしに環境との相互作用を通して一定の目的な方向性が形成されうることである」(同) という洞察が、実際のプログラム開発を導きうるということが示されたのである。以上のように、ハイデガーの反表象主義的着想は、認知科学に対し、批判者としてその不可能性を厳しく指摘するものとしても、独自の洞察によって積極的にアイデアを与えうるものとしても、両面から影響を与えてきたのである。

他方で門脇は、認知神経科学の成果の方から、「ハイデガーの反表象主義に有利な議論を提供」(七一) されていると考えられそうであるという点にも注目を促している。その一つが、A・D・ミルナーとM・A・

グッデルによる「二重視覚システム論」(Miller and Goodale 2006, 24)である。これは、解剖学的に見た二つの脳内部位に、すなわち一次視覚野から腹側系 (ventral stream) を經由する部位と、背側系 (dorsal stream) を經由する部位とに、各々異なる二つの視覚の存在を想定する仮説である。それらは各々「何 (what)」経路と「いかに (how)」経路と呼ばれるように、機能的に見ても独立した役割を担っていると仮定されている。つまり、前者は「対象の同定、カテゴリー化、運動からは独立な推論と想起、意識的知覚などに特化しており」(七二)、後者は「標的が物理的に目の前にある場合の、即決を要する、滑らかな運動的相互作用に特化している」(七二〜七三)のではないかと想定されているのである。以上の仮説を唱える二重視覚システム論は、後者の背側系を經由する「より行動と一体になった視覚の様式」(七三)を発見し、「人間の日常的活動が意識された知覚経験 (表象) によって制御されていないかもしれない可能性」(七一)を示唆することで、「知覚経験が独立に意識内に存在して、それが人間活動を絶えず制御しているという、現代を代表する見方」(七三)に疑問を呈していると考えることができるところで、第一節の冒頭で見たとように、この仮説に読み取ることのできるものと同種の疑義から「ハイデガーが日常的世界内存在に即して取り出して」(同)いたのが、「配視 (Umsicht)」という概念である。この配視は、「事物的存在者の特性や『何』を同定する『認識』とは峻別される」(同)、「非明示的な仕方では世界を開示する一種の技能」(同)であった。門脇は、ミルナーとグッデルが唱える「より行動と一体になった視覚の様式」の提案には、ハイデガーのこの『配視 (Umsicht)』という認知の様式を、認知科学的に基礎づける」(同)可能性があるのではないかと期待し、次のように述べている。³⁾「二重視覚システム論を推進している研究者たちは、背側系と腹側系の認知経路が統合されて相互作用を遂行していることに注意を払っている。もし、この相互作用についての見方が安定すれば、ハイデガーの了解と概念化をめぐる問題を解決するために、もう一步の前進が与えられたことになるだろう」(門脇二〇一〇、七六)。

哲学と認知科学の生産的な関係を考えようとする門脇のこうした視点は、ドレイファスと門脇の分岐点の一つの現れと見なすことができる。しかも、それはたんに両者の認知科学に対する態度の違いを表すだけではない。それはより根本的に、ハイデガー解釈における両者の異なり、そして門脇がドレイファスと分かれてどこを指していたかに関わっているのである。

三 解釈と分節化——門脇とドレイファスの分岐点

右に見たように門脇によって、ハイデガーの議論に認知神経科学的基礎を与えられるのではないかと期待されたミルナーとグッデールは、一九九四年の“The visual Brain in Action”の出版から十二年が経った二〇〇六年、五〇ページほどのボリュームをもつ新たな第八章を加えた第二版を公刊している。この第八章では、背側系と腹側系各々のはたらきと、その相互作用に関してその間に発表された実験データがまとめられて報告されている他に、初版の記述が『知覚』対『行為』という簡潔な用語を使ってしまったために「(Miller and Goodale 2006, 221) 読者に誤解を与えてしまったという反省に基づき、知覚と行為をめぐる哲学的考察にも多くの紙幅が費やされている。彼らは次のように述べる。「知覚そのものが、腹側系の存在する理由ではない。生物学的観点から見れば、知覚はそれ自体が目的なのではなく、何らかの目的のための手段である。最終的には二つの系の両方が行為に役立つために存在するのだということをもう一度繰り返し述べておくことには意味がある」(ibid.)。彼らは、「視覚的意識の内容は、腹側系における活動に依存している」(ibid.)としかつての自分たちの提案に、誤解を招いた一つの理由があったと推測する。たしかに「意識と腹側系の処理との間には密接な関係が存在する」(ibid.)と結論づけること自体は間違っていないが、現在ではかつてよりもなお多くの実験データがそう考えることの正しさを示しているほどである。しかしだからとい

て、「背側系の働きは、われわれの注意の決定に何の役割も果たしていないということにはならぬ」(222)のであって、そのことが十分読み取れるような記述になっていなかったことに原因があるというのである。彼らは、一つの行為は、純粹に知覚的な段階から自動的な視覚-運動制御に至るまで複数の段階を含みもつと考え、知覚対行為という図式が基礎としている処理のメカニズムに新しい光を当てようとする(242)。この観点から行為を理解しようとするとき、腹側系と背側系、「何」経路と「いかに」経路とを、各々、知覚と運動とに極端に割り当て、それぞれが単独で異なる活動に従事しているように受け止められる主張は決して適切ではなく、各々別のルートから働きつつも共に一つの行為を成り立たせているということをもっと明確に打ち出すべきであったと反省しているのである。

実は、門脇もまたドレイファスのハイデガー解釈に対して、この反省と歩調を揃えるような懸念を表明している。ドレイファスは、技能的ふるまいを導く配視がいかにも非明示的であり表象とは無関係であるかを明らかにした点に、ハイデガーの最大の功績を求める傾向が強い。だが、その点ばかりが強調されると、「ハイデガーが人間の概念的な認知能力を無視して、原始的で反射的な能力だけを前景に押し出しているかのような疑念を生じさせかねない」(門脇二〇一〇、七五)。門脇は、ドレイファスのハイデガー解釈には次のような難点があると指摘する。「問題はドレイファスが、非表象的技能知と、熟慮の上での行為における目的の主題的表象との間にあまりに厳しく境界を設け、この両者の実践知のあり方を事象的な経験の二つのタイプに一気に割り振ってしまったことにある」(三六〇三七)。「表象としての行為の知を遮断し、しかもそれ以上行為の知を問わないとすれば、バスケットボールのプレーヤーの目的的行為は、アフリカの大地で獲物を追ってゆく動物たちの目的的行為とさして違わないことになるではないか」(三六)というのである。配視に導かれる技能知と熟慮的行為とを各々孤立的に捉えてしまうという誤りに陥る危険があるとの門脇の懸念は、ミルナーとグッデルが示した自己反省と手を携えているように思われる。

もう少し門脇の主張を詳しく見てみると、門脇がドレイファスよりも重視しようとしているのは、野生動物などとは違い、人間に固有の行為は意図や理由と切り離すことができないはずだという点にあることがわかる。

目的の表象を伴わない行為のある瞬間を取り出してみれば、確かに「自分が何をしていたか知らなかった」とその人が答えるようなふるまいが人間の活動のなかに含まれることは事実である。しかしそのような行為ですら、ある「意図」を伴った行為の一部なのであり、言葉によってその行為の理由を行為者が挙げることでできる行為と切り離すことはできないのである。例えば、自分の行為に我を忘れていたバスケットボールのプレーヤーのふるまいが、その責任を問いうる「意図的な」行為であるのも、「ゲームをする」という包括的な意図によって引き起こされた行為の一部だからなのであって、決して、行為者による自覚的な意図の理解と無関係なものではない。(三七)

ここに姿を現しているのは、没入的技能と熟慮的行為との間には共通して意図の存在を認めることができるという門脇の主張であるが、これは、ハイデガーによる了解や解釈、語りや分節化という概念に対する、ドレイファスとは異なる方針の解釈に由来するものである。このような主張において門脇はドレイファスよりもハイデガーの「解釈 (Auslegung)」の概念を重要視しようとしているのである。門脇自身、次のように述べている。

ここに、ハイデガーの配視的な技能・了解が、すなわち、人間が環境世界に住まうときの技能が、概念やカテゴリー化をどのような意味で受け入れているのかをめぐる、議論と論争の余地がある。私は、存在了解は必ずその解釈をとまなう、というハイデガーの見解に、問いに対するハイデガーの答えを読み取りた

い。(七五)

そして、ここから、技能と明示的表象との連関を解き明かすことができるはずの、ハイデガーの独特な解釈の概念、またそれに伴う分節化の概念をめぐって、門脇独自の研究が展開されるはずであった。実際、了解と解釈の連関や、道具的存在性と事物的存在性の関係の問題、そしてとりわけ分節化としての語りの概念をどう解すべきかという問題は、未だ明らかにされ尽くしたとは到底言い難い問題である。十分には展開されることのなかったこれらの問題をめぐる門脇の見解は、それでもなお以下のような記述からその端緒を読み取ることができる。

たとえどれほど意識されていなくとも、私たちの日常的な行為は、それをめぐる解釈（とそれにとともに概念化）を受け入れる。私が講義でチョークを使うという配視的な了解は、チョークが折れて使えなくなったときには、「チョークが折れて講義がうまくいかない」というような解釈を出現させるのであり、このような解釈は、概念的な——ハイデガー自身の言葉を使うなら「分節化(Anknüpfung)」の——能力を前提にはいるが、命題と推論の一部となるという意味での概念化とは異なる。(七五〜七六)

このようにして、技能的ふるまいもまた、たしかに命題や推論とは明確に区別されるべきではあるがそれでもなお一種の概念化と呼ぶべき「分節化」をともなった「解釈」を受け入れているのだという点に着目することによって、門脇は、ドレイファスとは異なる方向へ独自のハイデガー解釈の道を見出していたのである。^④
ここでもう一度ドレイファスの『世界内存在』の序論を振り返ってみるなら、『存在と時間』でハイデガーが克服を試みていると思われる伝統的哲学の前提を五つ挙げる際、彼はすでに、門脇が最重要視する

「心的表象」よりも先に、「明示性」を筆頭に掲げていたことが目に留まる。(三つ目以降は、「理論的全体論」、「第三者性と客観性」、「方法論上の個別主義」である。)ドレイファスが何よりも真つ先に掲げて問題視したのは、「人間の生活をはつきりと明瞭な仕方でもコントロールする」(Dreyfus 1991, 4) べく「人間は種々の原理を適用することによって物事を知り行為を行っているのだ」(ibid.)と考える、「明示性」の前提だったのである。もちろん、第二、第三の前提や、第四の「第三者的な理論的な見方が実践に参与している見方に優るといふ考え方」(5) など五つの契機全体が結びついて初めて、伝統的哲学の前提は説明されるのである。しかし、背景的技能に着目するドレイファスは、他の章よりも際立って少ないページしか充てられていない「語りと意味」という章(第十二章)で、「分節化」には次のような説明を与えている。「指示全体性はずでに分節された構造を有しているが、この構造を最も基礎的な仕方でも説明するには、諸事物を用いながらそれらを識別するだけでよい。このことをハイデガーは分節化と呼んでいる」(215)。門脇が意図や理由と結びつけながら一種の概念化として捉えようとしていた分節化の概念が、ドレイファスにおいては使用や識別に引きつけられて解釈されている。以下の引用からもわかる通り、彼の主張の力点はあくまで、日常的な技能的対処を可能にしている背景的理解は根本的に決して明示化されえないものであるという点にある。「われわれの存在理解は、われわれが思考し行なっているどんなことにも浸透しているので、われわれは決してその存在理解を明瞭に明示することに成功できない。しかも、この存在理解は、信念システムではなくわれわれの技能に具現されているのだから、そもそもわれわれが明瞭にできるような種類のものではないのである」(32)。このような理解のもと、「解釈」に対しては、「日常的に何かに対処する際の理解から変形されて生じたものとして『派生』」(95)したものであるという位置づけを与えるにとどまるのである。

四 人間に固有の時間性の研究に向けて

門脇がドレイファスと道を分かち自らの突破口を見出そうとしていたハイデガーの「解釈」の概念についてわれわれが引き続き考えようとするとき、ハイデガーの哲学においてはそれが「被解釈性 (Ausgelegtheit)」の概念と切り離すことができないと言われていたことを思い起こすべきである (Heidegger 2004, 88)。この被解釈性は、単に解釈されているというだけのことではなく、すでに公共的に理解され解釈されてきた内容の堆積というようなことを意味する。われわれはみな、まずはこの被解釈性の中へと産み落とされ投げ込まれて育てられるのであり、必ずその中で自己や世界を理解していく (Heidegger 1972, 194-195, 383)。ここには現在を構成している、他者と共に存在する (共存) という契機とあらゆる理解や解釈に伴う歴史性という契機が現れている。ドレイファスが、われわれ現存在が何ごとかを理解し解釈することができるのは非明示的な背景の存在によると主張したとき、その背景が意味するものは技能的なふるまいであったが、非明示的な背景は、公共的かつ時間的な背景としても探究されなくてはならなかったのである。実際ハイデガーは『存在と時間』やその原型である論文「時間の概念」において、この被解釈性の概念を現存在の公共性の論点から説き起こし、歴史性の問題として発展させ、最終的には時間性一般の問題として論じている。

第二節で見たように、理解と概念化の問題の解明においては認知科学との対話に生産性を見出していた門脇も、歴史性や共同存在をも含めた世界内存在の構造全体を説明しようとする場合には、認知科学に懐疑的な態度を示している。そのことは、最新の人工知能やユビキタスコンピューティング技術に対し、「世界内存在を人工的に設計することの困難さはわれわれの歴史や社会を設計する困難さにも等し」(門脇 二〇一〇、五四) とし、その原理的な困難として指摘していた点に読み取ることができる。

ミルナーとグッデルによる自己反省には、このような困難に自覚的であることが現れているように思われる。前節冒頭で取り上げた新しい章で彼らは、実験室と日常生活という環境の差異にまでその反省を及ば

せている。ここでは、実験室で被験者に与えられる目的のない単純作業とは違い、日常生活ではわれわれは理由をもって何かを手を取ったり、食べたり、意図してねじ回しを用いて仕事をしたりしているという状況性を鑑みる必要があると言われる。そして、複雑な日常的行為がどのようにして過去に得た知識によって調整されているのか、そのとき腹側系と背側系はどのように関与しているのかという点にまで議論が進められる (Miller and Goodale 2006, 228-229)。もちろん彼らの主な実験は短い時間幅における視覚や運動に関わるものであるが、日常的行為の複雑な構造に迫る試みも数多く展開されている。例えば、腹側系が、過去の視覚情報や蓄積された諸表象を現在の状況下へもたらして利用可能にすることで、記憶に関わっていると思われるという仮説 (25, 248) や、慣れない行為を初めて行う際の構造とそれに慣れていく過程に二つの系が各々どのように寄与しているかという研究などである (48, 25)。しかし、このような複雑な行為における腹側系と背側系との相互作用については未解明な点が多いことが随所で強調されているのが現状である。彼らの反省には、「歴史や社会」のみならず、複雑な状況が関係してくる日常的行為や長時間をかけて成立する行為を、短時間のふるまいの際の脳の機能に関する実験によって説明することの難しさが現れているように思われる。では、この問題にはいったいどのような観点から迫っていくべきなのだろうか。

人間に固有な行為の歴史性や時間性について思考しようとする際にハイデガーがその解明の手がかりを求めるのは、不安や死への先駆という契機である。門脇がドレイファスに対して、「倫理的なものにもつながっていく人間の行為の問いに、彼は生物行動学的な答えしか提供していない」(門脇二〇一〇、三六)と指摘していたように、ドレイファスが挙げるバスケットボールの試合中などの場面では、現存在が自らの歴史性や時間性を問題とすることはない。円滑に作業をしている最中にはそのための契機が存在しないのである。日常性において没入していた行為が意のままにならなくなる不安という情状性や死への先駆は、そのための契機となる。不安においては、慣れ親しんでいた世界から何の意味をも見出すことができなくなり、死へ

先駆するとき、現存在は自らの非力さを引き受ける。いずれにおいても世界内存在という現存在のあり方の有限的な全体性が露わになり、自分がこれまでいかに自らを選び取ってきた（あるいは、こなかった）のか、どのように別様の可能性を存在しうるのかが問題となる。理論的観照とも全く異なる、現存在に即した仕方、それまでの日常において自らが身を置いていた歴史性や時間性が問われることになるのである。自らの存在の仕方を問わざるをえなくなるようなこれらの契機を、われわれ現存在の本質的構成契機と捉えて探求するのでなければ、歴史性や時間性の問題に接近することはできない。

このことをハイデガーは『存在と時間』の後半部で論じていくのであるが、その前半部に解釈を集中させたドレイファスと、解釈や概念化の観点から自らのハイデガー研究をこれから構築していく過程にあった門脇が、表立って全面的には論じることのなかった歴史性を含む時間性一般の問題を、二人に倣ってハイデガー哲学の文法に完全に絡め取られることなく、またハイデガーの発展史的観点に議論を限定させてしまうことなく探究していくことこそ、両者の問題の一端を引き継いで思考していく一つの道である⁽⁵⁾と考える。

註

(一) このことに関しては、哲学的思考のあり方についての門脇の考え方に言及しておくことにも意味があるように思われる。門脇はドレイファスによるハイデガーの読み方以下のような点でも賛意を示している。「哲学的思考においては、各人が自らの明瞭な言葉で、自ら一人の責任においてその思考をわがものとし他者に示すこと以外に、哲学的である方法はない。ハイデガーの哲学的文法を破壊しかなないドレイファスの読みは、ハイデガーの思考を自らの責任で引き受け直すことによって、逆にハイデガーの思考と歩みをともにすると自認することができるのである」(門脇二〇一〇、二二二)。「真面目なハイデガー研究者や現象学者たちのサークルのなかでは、哲学的な諸問題についての関連な議論や論争が起こっていない」(二三三)と感じ、危険を冒して領域横断的に人間の知覚や行為についての議論を重ねた門脇自身の思考もまた、ドレイファスと、そしてハイデガーのそれに連なるものである。もちろんそれと同時に門脇は、自己責任的な思考が、自らの前提としているものの繰り返しに陥る危険性を必然的に伴っていることにも、そもそも自己責任という概念が「本質的に一定の文脈の拘束のもとにしか現れてこない」(二二二) ことにも十分に自覚的であった。

